

## 土地の持つ力

このたびの東日本大震災で罹災された皆さまに、心からお見舞い申し上げます。古典文学研究者に何ができるのか、自問自答する毎日です。

天皇の御代栄えむと  
東なる 陸奥山に 黄金花咲く

(卷十八—四〇九七)

天平感宝元(七四九)年に大伴家持によって詠まれた、国内で金が発見されたことを言祝いだ歌の一首です。

この頃、平城京では東大寺の盧遮那仏が造立されていましたが、大仏に鍍金するための黄金は不足していたそうです。『続日本紀』には、国内で初めて砂金が発見されたことで、聖武天皇がことのほか喜んだことが記されています。これを記念して「天平感宝」と改元されたほどでした。

このとき仏前に奏された詔が、大伴

氏のかつての功績にも触れていたことから、それを知った家持は感激してこの歌群(卷十八—四〇九四—四〇九七)を詠んだといえます。その長歌(四〇九四)では、黄金を産出した「陸奥山」が「東の国の陸奥の小田なる山」と表現されています。「小田」は現在の宮城県遠田郡を指し、湧谷町にはゆかりの黄金山神社があります。「東の国の陸奥」とあるのは、当時の行政区域としては、現在の宮城県周辺は「東の国」であり「陸奥」でもあったことに拠ります。当時、大和国から官道が五畿・七道にのびており、古代の陸奥国とは東山道の北端の国でした。だからこそみちのく(道の奥)と呼ばれたといえます。万葉歌が詠まれた頃その領域は未だ固定せず、大和政権の北進に伴い、道も国もどんどん拡張されていたようです。

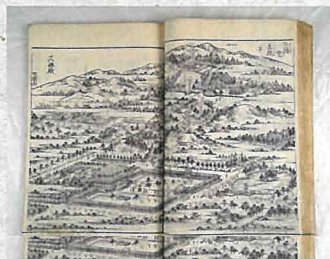
この歌を読むと、黄金が東日本から

もたらされたとき  
聖武天皇  
もまさに  
黄金の花  
を幻視し  
たかもし  
れない、  
などとい  
う想像を  
逞しくし、

古代の国造りに思いを馳せずにはいられません。土地の持つ力とは、その土地が重ねてきた歴史の記憶であり、育んできた生命の力であると思えます。

未曾有の大災害の爪痕は深く、これからは長く険しい道程を強いられる現代が、新たな国造りに直面している現代において、東日本の持つ底力が、再び黄金の花を咲かせると信じています。

(万葉古代学研究所主任研究員・井上さやか)



『大和名所図会』(1791年刊)東大寺大仏殿